二〇二四年一二月一三日

はぐれたる我を呼ぶ声歳の市　澄子
中庭に渦巻く風の落葉かな　康子
風邪癒えて久々の風呂熱あつに　なつき
着膨れて路地練り歩く吟行子　せいじ
ふたかみへ天使の梯子冬日差し　明日香
無音界窓を開ければ雪二尺　ほたる

二〇二四年一二月一二日

門ごとの菊よく香る京街道　あひる
座布団のよく膨らみて縁小春　わたる
山茶花の初花を愛ず箒持ち　よし女
映画館出でて遥かに雪の富士　風民

二〇二四年一二月一一日

番鴨同じ角度で着水す　澄子
里芋を再び畑に眠らせり　風民
吟行子樹下に集へば小鳥来る　あひる
薪割りの音響く里日短　むべ
隣り合ふ寺院とチャペル路地小春　せいじ

二〇二四年一二月一〇日

剪定を了へて青空展けけり　澄子
掃かず置く友待つ庭の散紅葉　風民
叡山の白く尖りし師走かな　もとこ

二〇二四年一二月九日

茶の花の昏れゆく金の蘂もまた　むべ
山茶花のほぐれてのぞく朱唇かな　よし女
病窓へ青空透かす冬木立　康子
着膨れにされて乗りたる車椅子　康子

二〇二四年一二月八日

チェロの音に夜船を漕ぎし暖房裡　うつぎ
枝絡む朝日に膨れ寒雀　むべ
朴葉味噌つつきて飛騨の旅想ふ　うつぎ
斯く太き大根貰ひどうしやう　よし女
ひとひらの枯葉きりもむ美空かな　あひる
コート着るチェロの残響包みつつ　風民

二〇二四年一二月七日

と見る間に乱舞の鴨の陣なせり　うつぎ
よだれかけのみの丸石そぞろ寒　明日香
産土は園児らの庭木の実雨　なつき

毎日句会みのる選・二〇二四年一二月一五日